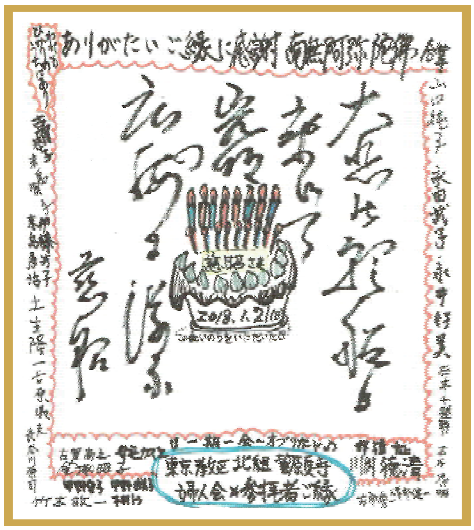
しんらん同人

No,553
11・12月号

浄土真宗本願寺派 誓願寺
〒171-0052 東京都豊島区南長崎1-3-8
【電話】03-3950-7828 【ホームページ】http://www.seiganji-tokyo.jp/

『大悲の願船に乗じて光明の広海に浮ぶ』
［高田慈昭書］



報恩講（場所：誓願寺）
11月24日（日）午後1時より
報恩講は浄土真宗にとって大切な法会です。
お誘いあわせの上お参りください。

われもひかりのうちにあり

誓願寺住職　古賀尚之

この夏以降、大型台風が十五号・十九号と相次いで日本列島に上陸し、各地に未曽有の被害を与えました。今なお復旧の途上の方々が沢山いらっしゃいます。心からお見舞い申し上げます。

誓願寺も東側一階の数か所から雨漏りが発生しましたが、大事には至りませんでした。しかし、どこから漏れていたのか不明で今後のこととして心配しております。

十九号が通過した当日は相模原で法事があり、前日から市内のホテルに宿泊しました。地形もわからず翌朝起きたら車が水没していないか、式場にたどり着けるか等何度も心配し、テレビを確認、暴風の音を聞きながら床に就きました。

結果は、おかげで車の水没もなく、法事も終わり無事帰りつくことが出来ました。後で分かったことですが、相模原市内も随分被害があったようです。

多くの自然災害のうち、台風のみが予測可能な災害だと言われる時代になったといわれますが、今まで出会ったこともない大災害を、自分のこととして捉え、具体的対策を取ろうとする時、それまでの準備不足や不安さをつくづく思い知らされた出来事でした。

「予測可能な大災害！そう言われれば、私はいずれ死ぬんです。」今まで出会ったこともない大惨事（自分の死）が、私のこの身の上に百パーセントやってくるのです。

他人のことではありません。自分のことなのです・・・・

誓願寺 初代住職
故 岡本 泰雄

私の領解

私は本当に幸せ者だと思う。常に如来の大慈悲に生かされて生きているからである。

私が如来を思う時も、忘れている時も、常に私を思い続けてくれる如来が存しますからである。

如来は大慈悲心のありったけを、「南無阿弥陀仏」のみ名に仕上げ、私に恵まれる。私はそのみ名を称え、如来は常に我と共に存しますことを知らされる。

如来の光明は、私の心の奥を照らしたもうて、我の真実相を知らしめたもう。

私は私自身を知らなかった。正しき我であり、善なる我であり、まことなる我であると思い誤っていた。

私の良心の灯はローソクの火にも及ばぬあわれなものであった。されば私のすべてを照らし出す力のない光であった。

私は今、限りなく障りなき如来のみ光に遇い、罪業深き我なりを知る。

一日一日がただ煩悩の波にほんろうされながら生きている自分であった。そしてその波は、知らぬ過去から打ち寄せてきた波であった。

もし仮に、今起こり来る波を止めようとしても、過去からの波の力ではどうすることも出来ない力であった。

そしてその波は、これから先、いつまで荒れ続けるかわからぬ大波である。山のようなうねりを持ったこの大波をどうすることも出来ない自分であった。

遠い闇の底からごうごうと打ち寄せる波、遠い未来にまでうねりゆく波。その波の不安な音を、現在の自分の心の底に聞くことが出来る。

無明の中を大波にほんろうされてゆく我は、救いを求める声も力もない。力なき我は、全く救われる望みなき者であった。

「いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」は、親鸞聖人の血の出るような苦悩の叫びであった。

されど、その叫びこそ、如来の叫ばしめたもうた声であり、如来の光明の透徹であった。

地獄一定の我こそ「必ず救う」のめあてであった。救われるか救われないかは私の問題ではない。救わずばやまぬ如来の真実のみであった。

何とか落ち着きたい、安らかになりたいと永い間願い求めたことであった。求めても求めてもそれは無明の闇の底にうごめく我でしかなく、どこに至りつくやら判らぬ我であった。

今しも、如来の声を聞けば、如来こそ我が苦悩を見通し、この苦悩故にこそ本願を成就したもうたことであった。

我、如来を求めしに非ず。如来こそ我を求め続けたまいし真実の親であった。

まちがわぬのは、無明の底から差し出された煩悩の手ではなく、まちがわさぬ手、真実の親の手であった。

無窮の願力の前には、善悪も正邪も問題とはならぬ。罪業深き我なるが故に、救済の行が成就せられたのであった。

一つの念仏の中に、あふるる大慈悲がもられてあった。

釈迦も善導大師も親鸞聖人も蓮如さまも、みんなこの慈悲に恵まれて生き抜かれた人達であった。

尊い一生を通じて得られたよろこびの実感をそのままに、我に伝え知らしめられた善知識であった。この善知識なくば、行信を獲る身とはなり得なかったであろう。

「たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ」この口からほとばしる念仏、ただ一声の念仏も、この念仏が出るまでには、どれ程の御苦労がかけられたことであろうか。

社会に生きる限り、社会人としてつくすべき務めに励まなくてはならない。しかし、世の人々の恩恵に報い得るだけの営みが私になされているであろうか。つくし得ぬ私を、黙って許してくれる世の人のなさけを有難く思う。

間違うかもしれぬ。きっと間違いだらけであろう。それを許されて生きるには、ただ合掌するばかりである。

恵まれて生きる私は、ただ全力をつくして生きよう。お念仏を申しながら、大悲のみ顔に泥をぬることなきように。

やがて、愛する者を残してただ一人この世を去らねばならぬ時が來るであろう。まぬがれぬ人間最後の日である。

されど帰るべき家がある。如来に抱かれながら、光明無量の浄土に帰るのである。あゝ幸せなる哉。

（岡本泰雄　四十歳）

仏座像（説法）

サハリ＝バハロール出土
ペシャワール博物館蔵
（パキスタン）

誓願寺 副住職

古賀 明徳

『しかれば、
大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、
至徳の風静かに衆禍の波転ず』

9月に行信教校での3年間、伝道院での半年間の勉強を終えて誓願寺に帰って参りました。たくさんのご門徒様、住職、坊守、私を支えて下さった多くの友人、知人のおかげでなんとか布教使にまでならせていただけました。改めて御礼申し上げます。

さて、最初に書かせていただきましたお言葉は浄土真宗の宗祖親鸞聖人が『顕浄土真実教行証文類』に著わされたお言葉であります。昨年までご高齢にもかかわらず、毎月誓願寺のご法座にいらして下さっていた高田和上が往生される前に色紙に残して下さったお言葉でもあります。

阿弥陀さまの慈悲と言うお心でできた船に乗せていただいた者は、南無阿弥陀仏のこの上ない功徳を持った風を受け、今まで感じていた悩みや苦しみの人生の波は転じられて治まり、間違いなくお浄土に至ることができるという意味を持ちます。

私はこのお言葉にたくさんの味わいをいただきました。今日は改めて自己紹介を兼ねまして少しばかり、そのお話をさせていただきたいと思います。

私は、阿弥陀さまのみ教えと出遇う前までは飲食業界で働いていました。そこではいつも自分と周りを比べ、誰にも負けたくない、誰よりも優秀な成績を出してやろうと必死でいました。周りにいる人たちを皆ライバルのように思っていました。

そんな時に私が出遇うことができたのが阿弥陀さまのみ教えでした。当時の私は、ほとんど仏教に対して知識が無かったので、たくさんの方々の勧めにより大阪の行信教校と言う浄土真宗の専門学校に通うことになりました。

はじめは、誰よりも勉強をして良い成績で卒業してやるぞ！と思い周りと自分を比べ、必死に勉強をしていたのですが、行信教校で3年間過ごさせていただき卒業するころには、多くの尊敬する先生方、周りにいた多くの友人たちによって、そのような考え方は変えられていました。

行信教校にいて下さった方々は誰もが「どんな人間であったとしても必ず救って見せる」と誓われた阿弥陀さまを同じように尊いと仰いでおられて、自分と周りを比べることをせずに、お互いを支え合い、助け合っている人たちばかり、今自分がここにこうしていることができるのは多くの方々のおかげさま

であるということを体感されている人たちばかりでした。そこに競争意識のようなものはありませんでした。

自分と周りを比べ、そこに悩みや苦しみを生み出してきた以前の私のような人間はまったくいませんでした。そのような環境の中で3年間過ごさせていただいた私は卒業の際には、阿弥陀さまのお救いの光の中に多くの方々と居ることができる喜びを感じることができました。

卒業式の際、私は大好きだった行信教校の校長先生でもある天岸先生に一筆頂こうと色紙を持って伺いました。天岸先生は色紙に高田和上がお書き下さったものと同じ「至徳の風静かに衆禍の波転ず」というお言葉を書いてくださいました。そして、満面の笑顔で私に「あなたはもう大丈夫だ」と仰ってくださいました。

天岸先生に何が大丈夫なのか、聞くことは出来ませんでしたが、私は何となくですがいただいた色紙のお言葉と行信教校での学びから、その意味が分かったような気がしました。それは、自分と周りをいつも比べ、悩みや苦しみを生み出していた私であったのですが、阿弥陀さまは様々な方々との出遇いを通じて私に「今の私と言う存在は多くの方々のおかげさまでいることができる喜びと、そしてこの世界との縁が尽きた時には間違いなくお浄土と言う光の国へ仏さまとして生まれさせていただける喜び」をお伝えしてくださり、それを私が少しだけ知ることができたから、もう大丈夫だと仰ってくれたのではないだろうかと感じることができました。南無阿弥陀仏の風を受けていることを実感し、悩みや苦しみの波は転ぜられ、出遇えた喜びへと変わっていました。

最初に書かせていただきましたように、私は布教使にならせていただけました。他の宗派の場合は「布教師」と仏教を伝える、教えるという意味もあるのか「師」という言葉を使いますが、真宗では「使」と書きます。浄土真宗における布教使とは誰かに何かを教えるという立場では決してなく、皆様とご一緒に阿弥陀さまのみ教えをお聞かせいただこうという立場であります。私が布教使になりたいと思ったのは、今まで出遇わせていただいた人々、そしてこれから出遇う多くの人々とご一緒に阿弥陀さまのみ教えをお聞かせいただきたい、喜んでいきたいと思ったからであります。

まだまだ拙い私ではございますが、是非皆さま、前よりももっともっと気軽に誓願寺にいらして下さい。そして、皆様の大好きな阿弥陀さまのお話を一緒にしましょう。楽しみにしております。

【ご法座等のご案内】

11月

11・10（日）
■午前十時～
定例法座【岡本信悟師】
■正午～
医療相談【佐藤公彦医師】

11・17（日）
■午前十時～
なかよしクラブ
（乳幼児から小学生まで）

11・24（日）
■午後一時～
報恩講・祥月命日合同法要
【野崎到師】

12月

12・8（日）
■午前十時～
定例法座【岡本信之師】
■正午～
医療相談【佐藤公彦医師】

12・15（日）
■午前十時～　なかよしクラブ

12・22（日）
■午後一時～
定例法座　祥月命日合同法要
【山本摂叡師】

12・31（火）
■午後十一時五十分～
除夜会　＊年越しの鐘を撞きませんか

1・1（水）
■午後一時～　元旦会

編集後記

今年もあと二ケ月で新年を迎えます。皆様にとってどの様な一年でしたか。それでも、あと二ケ月もあると思えば、まだまだなんでも出来るはずです。充実した一年でありたいものです。

令和二年のカレンダーが出来上がりました。定例法座等の押印をして、お届けの予定です。なおつもながら、法座のご講師依頼につきましては、大恩寺　慈恩寺のご住職にご尽力賜りましたことを、ここに御礼申し上げる次第です。

令和二年の来寺記念品も決まりました。お楽しみに。

朝夕の寒さが身に沁みるこの季節、待望の干し柿造りに思いを馳せながら渋柿を探してドライブをしています。今年の目標はまず百個作ることです。

十月十三日（日）の定例法座は、台風のためやむをえず休座といたし寂しい限りでしたが、報恩講法座は多くの皆様のお参りをお待ちいたしております。